

さて、パイプのけむり

團 伊玖磨



15

さてパイプのけむり

團 伊玖磨



15

朝日新聞社

だん い く ま
團 伊玖磨

大正13年4月7日東京生れ。昭和20年東京音楽学校（東京芸術大学）作曲科卒業。以後作曲ならびに自作の演奏に従事。昭和41年日本芸術院賞受賞。「パイプのけむり」「続パイプのけむり」で第19回読売文学賞（随筆・紀行）受賞。日本芸術院会員。

作品 歌劇「夕鶴」「ききみみずきん」「楊貴妃」「ひかりごけ」他、交響曲5曲他、歌曲、劇音楽等作品多し。

著書 「朝の国・夜の国」「不心得12楽章」「エスカルゴの歌」「パイプのけむり」「続パイプのけむり」「続々パイプのけむり」「又パイプのけむり」「かんざあせいしょん・たいむ」「九つの空」「又々パイプのけむり」「まだパイプのけむり」「僕のハロー・グッドバイ」「まだまだパイプのけむり」「も一つパイプのけむり」「舌の上の散歩道」「なおパイプのけむり」「なおなおパイプのけむり」「八丈多与里」「重ねてパイプのけむり」「重ね重ねパイプのけむり」「なおかつパイプのけむり」「またしてパイプのけむり」。

日本音楽著作権協会(出)許諾第 8460053-401

さて・パイプのけむり

昭和59年9月25日

第1刷発行

著 者

装 幀

発行者

印刷所

発行所

團 伊玖磨

多 田 進

初 山 有 恒

明善印刷株式会社

編集・図書編集室
販売・出版販売部

〒104 東京都中央区築地 5-3-2

電話・03(545)0131(代) 振替・東京0-1730

定価 1400円

Printed in Japan

ISBN 4-02-254885-1

© 1984 IKUMA DAN

さて

パイプのけむり

も
く
じ

面接取材

踏み竹

後樂園

留指甲

風邪気味

記念寫眞

ナン・マドール

馴化園

GOOD DAY

種子鋏

火の変遷

「あ、そりゃ不可ない」

76 72 63 55 51 39 35 31 23 18 13 5

悲喜交交

落日

筍

佛の座

たかが

握り拳

白毛魚

曇り空

横横道路

和蘭陀雉隠し

ルビー

瘦身術

オルフェのハープ

熱河行宮

154 148 140 131 127 122 117 112 107 99 95 90 86 81

半夏生

馬拉松

フェロモン

必要・不必要

朝の約束

化粧

ポルトガルの靴

天津麵

黄槿

厚頭

あとがき

駅頭点描

千夜一夜

呆ける

大矢數

東北四珍

鞆の中

瘦身術——その後

169

259

177

264

185

271

193

198

206

211

275

217

226

232

236

244

248

255

写真・團 伊玖磨

朝日新聞社
図版・吉沢スタジオ

面接取材

「でしたが、先生は、御健勝のことと、お慶びです。社会情勢全般につきまして、多角的な検討をなさることを目的としております。つきましては、御意見を伺いますけれども、この度の国会におきます最も重要な改革問題につきまして、先生のお考えをおうかがいする次第でございます。私どものほうから先生に集担当者が御指定のお時間、場所におうかがいにてお受けいたしますことも可能かと存じます。

57・10・8―15

万事御手輕な時代になって来たためであらうか、インタビュー、詰まり面接取材の人——インタヴューアーが訪ねて来る事が多くなった。その事に就いてはこちらにも責任があつて、何々の雑誌ですが原稿の執筆を御願ひしたいのですがという申し出を片端から断つてしまふからである。

「原稿はアサヒグラフの『パイプのけむり』以外は原則的に書きません。作曲と自作の演奏とその練習と『パイプのけむり』で僕のエネルギーと時間の一〇〇パーセントは使われ

ていますから」

断る時に僕は何時もこう言う。

ところが、それだけで済む場合もある一方、どうしても僕の意見を聞かなければ納まらないという変った相手もあって、そういう相手はインタヴューを提案して来る。

「無学文盲、楽士無頼の僕などの意見を聞いてみても何の役にも立たないでしょう。お止めになつては」

と幾ら言つても、いや、少数意見も大事ですからとか言つて、スケデュールがどうのこうのという話しになる。そうなれば嘘は言えないから、来週の火曜日は東京に出て、五時から五時半迄の間でしたら何とか都合が付きますから赤坂の僕の連絡所でお逢いする事が出来ます、とか、木曜日と金曜日は「パイプのけむり」を書く日ですから駄目ですが、土曜日でしたら二時から三時迄の間は作曲の中休みのお茶の時間ですから、その時間に自宅でもよろしかったらお逢い出来ます、などと正直を言う羽目になる。こちらにも責任があつて、原稿を書く事になれば自分で決めた時間の運びが乱れてしまうけれども、少しの間のインタヴューならば、多少の気分の転換にもなるだろう位の甘い感覚が働いている事も否めない。

ところが、そうして現れるインタヴューアーの殆んどが、どうした事か、これでも職業人かと疑いたくなる程の不勉強な人が多く、困つてしまう。今迄、決して誇張で無く数百

人のインタヴューアーから面接取材を受けたけれども、その中でこれは優れたインタヴューアーだと今尚記憶に残る人は数人に過ぎない。そしてその数人の殆んどは何故か雑誌記者では無く、新聞記者だった。

最近やって来た若い女性インタヴューアーの最初の質問は、先生は何をされる方ですか、という質問だった。作曲をしたり、指揮をしたり、文字を書いたりしていて、何が何やら判らない、一体貴方の本業はそのうちのどれなのですかという所謂一寸ばかりキリーな質問なのかと思ったら、全くそうでは無く、その若い女性は、頭からインタヴューをする相手、詰まり僕に就いて下調べをしていないのだった。そこで、僕の方が彼女にインタヴューをするような変な事になった。

「僕は何をしている人間に見えますか」

「はい、何か芸術関係の学校の先生をしていらっしゃるのでは無いでしょうか」

「生憎、僕は学校には一切関係しない事にしています」

「はあ」

「何歳に見えますか」

「そうですね、昭和二、三年のお生まれでは無いでしょうか」

「生憎、僕は大正十三年の生まれです」

「そうですか、お若く見えますわ」

「大体ね、貴女は僕に何を聞きに見えたのですか」

「教科書問題に対する御意見をお聞きしに参りました」

「僕が何をしている人物か、何を考えている人物かを調べる事は前以ってしなかったのですか」

「はあ、急にデスクに行つて来いと言われたものですから」

「ほう」

「今度の教科書問題をどうお思いですか」

「いや、教科書問題に対する意見をお話するのは止めましょう。大きな問題ですし、責任のある意見を慎重に言いたいからです。貴女はインタヴューをする人物のアウト・ラインを調べて来る事さえしなかった。同じように、貴女は教科書問題の包含着している諸問題、それに何故にこんな事態が起こったかの裏側、又日本が惹起した侵略戦争とその終結時の故事来歴を調べて来ていないに違い無い」

「えゝ、デスクに急に言われましたので」

「それなら、帰つてデスクに言いなさい。こんな大きな問題に対する責任ある意見を聞くために人を寄来すなら、矢張り責任と資格のある人物を寄来すように」

「はい」

「お嬢さん、仕事というものは難しいものですよ、ましてや良い仕事、鋭い仕事をしようとするならば、最低のところから言つても、少なくともその仕事に向かうための資格を自分の中に作らなければ、仕事の始めよう、しようが無いでしょう。今度から、インタ

ヴューに出掛ける時には、扱う問題はもとより、自分がインタヴューをする人物に就いて位は充分な下調べをするようになさい。これが今日のインタヴューで僕が貴女に言う意見です」

「はい」

僕の言った意味が判ったのか、判らなかったのか、兎も角彼女は従順に帰って行った。

それ程ひどいインタヴューアーは少ないとしても、^{やや}少々それに近い場合は枚挙に遑が無い。先ず、驚く可き事に、音楽に興味を持つ取材者は文学や自然科学に興味を持たず、その反対も亦多いという事である。こうしたインタヴューアーを前にして質問を受けていると、どうしてこうも狭い経験と人生観の中に暮らしているのかと訝ると同時に、こうした人達が所謂文化の世界で、何と無く一人前の顔をして暮らしている事に恐怖をさえ覚えてしまう。

去年は山田耕柞先生の十七回忌だったのと、山田先生がピアノ・スケッチの儘残された遺作の歌劇「香妃」^{オペラ}を、先生の遺志を受けて僕が完結したオーケストレーションに依って初演したために、先生に就いてのインタヴューを何度も受けた。ところが、インタヴューに現れた面接取材者の大半は山田先生に就いて「赤とんぼ」や「この道」や「からたちの花」のような歌謡曲作曲家としての面しか知らぬ人が多かった。先生がその前半生を苛

酷な経済条件と戦いながら費された交響楽運動や、その中で書かれた管弦楽曲や、「墮ちたる天女」「あやめ」「黒船」等の作曲と上演を通じて亡くなられる迄続けられた歌劇運動や、又、当時の日本では考えられなかった程高度な「AIYANの歌」や「ロシア人形の歌」などを知らない人に、いきなり先生の一生の総決算である「香妃」の話しをして、一体その人達は何をどの程度理解するかを考えると寒々とする思いだった。中には、山田先生に管弦楽曲の作曲があったのですか、知りませんでした、と言った人も居るし、童謡以外の曲は聴いた事ありません、と言ったひどい人も居た。「香妃」の取材に来るのに、ドイツやイタリアのオペラを碌々聴いた事の無い人も来た。これではインタヴューは無理である。

自分の事は言い難いが、僕がインタヴューを受けて最も困る事は、インタヴューアがこちらの事を知らない過ぎる事の次に、事の本質に興味を持たずに、全くの枝葉末節のみを聞きたがる事である。例えば新しいオペラが出来上がって、その初演を取材に来た人が、「何か作曲に関してのエピソード、裏話がありませんか」

と訊ねる。

人に隠れてこそこそ作曲している訳でもあるまいし、作曲に裏話しなどがあり得よう訳は無いではないか。もし又そんな事があったと仮定しても、それがその作品の本質とどういう関係があると言うのだろうか。

「どんなところに御苦心をなさいましたか」

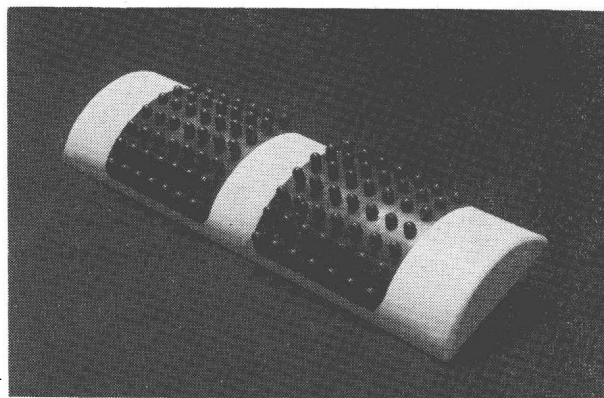
これもよく受ける質問だけれども、素人ではあるまいし、何頁の何小節目を苦心して作りましたとも言えばその人達は満足するのだろうか。そんな事を言えば、始めから終り迄御苦心のしつ放しの訳だし、創作に苦心が伴わぬ訳は無いのだから、死ぬ迄御苦心の連続の訳で、然し、それはこちらの勝手に、口にす可き事柄では無いと思う。作品というのは、音楽の場合は、聴いて良ければそれで良いのだし、悪ければ悪いだけなのであって、作者が創作中苦心をしようが、しなかるうが、そんな事は作品の本質に関係が無い筈である。これは、文学でも美術でも同じ事だと思う。ところが、世の中には半分素人のような作家も居て、この作品ではこれこれの事を表現しようと思いましたが、これこれの点に苦心を払いましただのと言う作曲家、作家、美術家も居て、僕はそういう人達の神経は全く判らない。表現しようと思えば表現すれば良いのだし、表現しようと思っても、表現されていなければ、表現しようと思わなかったのと同じ訳なのだから、要するに要らぬ言辞だと思うのである。

僕の総べてを取材したいというインタビューアが現れた事がある。総べてと言うからには総べてを話そうと思って準備もして待っていたら、現れた人は妙に随筆の事ばかりを話すので、音楽に話しを移すと、何とこの人は、僕の五つの交響曲、五つのオペラ、数百の歌曲や童謡の何も知らないどころか、興味も無いのだった。訊いてみると、「パイプのけむり」の単行本を一冊読んだ事があります、という事だった。僕は「総べて」というような言葉を安易に言わぬように忠告して、その人にも帰って貰った。

世の中の人達是不思議である。例えば、僕の作曲を愛して呉れる人達は、口を揃えて、随筆を書くのは止めなさい、貴方の作曲の時間をそんな無駄な事のために使うのは残念だと言ひ、僕の随筆を読んで呉れる人からは、どうか作曲のような無駄な事は止めて、随筆をどんどん書いて下さい、と、つい最近も「パイプのけむり」の読者からのお手紙を戴いた。

僕はそうした言葉を厭になる程聞きながら、自分の興味の無い事を無駄と言ひ切るそうした人達の少々粗雑な神経を遣り切れ無く思いながらも、人を一面的なものに思いたがるのは、特に日本人にとっては致し方無い事なのだろうと考える。人には色々な面がある。僕にも、作曲家の顔と、文章を書く顔と、オーケストラや合唱を指揮する顔と、世界中を歩き廻る旅人としての顔と、まだ色々な顔があつて、その色々な顔を知った上でインタヴューに來いと言うのは無理な事だろうとも思う。然し、人には色々な顔があるとする考え方もあると同時に、そうした色々な要素が集まって一つの顔を作り上げているのだとも考えられる訳で、そうであつてみれば、これからは、どの道判つて貰える筈の無い人などから申し込まれるインタヴューなども、矢張り、片端から断つてしまふのが正しい姿勢なのかも知れないと考えている。

踏み竹



57・10・22

一億総健康ノイローゼとでも言うのだろうか、多くの人が寄ると触ると健康法に就いて話しをしていて、やれ煙草を止めたの、酒を節する事にしたの、米飯を減らしたの、体操を始めたのと言っているのを心密かに嘲笑い、どうせ長生きするという事は、何れはぼけた老人になってから死という鉄槌が下る迄が長いというだけの意味なのだから、子供や周囲の人達に迷惑を与える期間が長くなるだけである事を気付かずに、何で又そう矢鱈に長生きがしたいのかと思いつながらそんな話を聞いて来た。

話を聞くだけでは無い。東京に出れば、自動車の排気ガスで向こうが霞んでいるような街衢をジョギン

グに励んでいる人を見ては、果たしてあんな汚れた空気を吸いながら走り廻る事が身体に良いのかと心配し、友人の家を訪ねて、毎朝三分間これに両手で吊り下がっているのだという妙な鉄の枠のようなものを見せられては、ふと気でも変って首でも吊らねば良いかと心配し、健康のためにゴルフを始めたという友人に電車の中で逢って話しているうちに、健康のためと称するのは単なる言い訳で、結局は面白いからゴルフ場通いをしているに過ぎない事を発見したりするのである。妙な人は世の中に沢山居て、健康のために麻雀を始めましたと言う人物にも逢った。指先きを動かす事が良い事なのだそうで、麻雀の牌を弄る事は指先きを動かす事になるので健康に良いと言うのである。然し、この人物は、昨夜も健康のための麻雀で半徹夜をしたので眠い眠いと眼を擦っていた。妙な健康法もあるものである。

そんなこんなで世間の健康ノイローゼを嗤ってはいたものの、此処だけの話したが、ふとした事から僕自身も妙な健康法を実行する羽目になって、今迄さんざん心の中ではあるが嘲笑っていた関係もあるので、人には言えず、さりとて止める訳にも行かず、進退谷まった毎日である。

一体、何をこそこそとやっているかと言うと、踏み竹という妙なものを、朝起きると裸足で三百回宛踏んでいるのである。どうしてこんな事をするようになったかと言うと、半年程前に、今は名古屋の支社に居る専売公社の佐藤吉明君という親友が、上京の序でにぶらりと現れて、はい、お土産、と言いながら、細長いボール紙の箱を僕に呉れたのであ